

圖 版 解 說

一四 隋開皇十三年造阿彌陀如來像一具

米國 ボストン美術館藏

銅製 總高七六・七糶、本尊高四一・九糶、持柘榴果菩薩像高三四・一糶、合掌形菩薩像高三四・〇糶、持水瓶比丘像高（柘を除く）一九・三糶、讀經比丘像高（同）一九・二糶、持鉢侍者像高（同）一九・二糶、持香爐比丘像高（同）一九・〇糶

（矢代幸雄「隋開皇十三年造阿彌陀銅像一具」參照）

五 地藏菩薩像

東京 伯爵 柳原義光氏藏

掛幅 絹本着色 豎九六糶 横五四・五糶

此の圖の如く、就縛跪坐する罪囚に影向する地藏尊像の、通途所見のものと異る、その説明は圖上題文に求めらるべく、

京師人姓王既無戒行

曾不修善死被引二人

至地獄門前地藏菩薩

教一偈曰

若人欲求知 三世一切佛

應當如是觀 心造諸如來

王氏盡誦至閻羅王所

具誦此偈王遂放免

誦此偈時聲所及處

交苦之人皆得解脫

王氏（始蘇）檢看果是

圖 版 解 說

華嚴十行偈中最後偈

也纔聞一偈千萬人一時

脫苦咒受持全部講誦

深義耶

と見ゆる處に解釋せられる。此の説話は、三寶感應要略卷中大正藏經第五十

第六王氏感地藏菩薩感應別記等

京師人。姓王失其名余記名定藏也既無戒行。曾不修善。文明元年。因患致死。二人

引至地獄門。王氏本本地藏菩薩。見有一僧云。是地藏菩薩。乃教王氏誦一行

偈。其文曰。若人欲了知。三世一切佛。應當如是觀。心造諸如來。菩薩曰。

誦得此能排地獄。王氏盡誦。遂入見閻羅王。王問此人。有何功德。答云。唯

受持一四句偈。具如上記。王遂放免王氏。當誦此偈時。聲所及受苦之人。皆

得解脫。王氏三日。蘇向諸沙門說而已。所言一偈者。花嚴第十二卷夜摩天宮無量諸菩薩雲集說法品文也云々

と在るに淵由するものと推せられる。地藏尊の靈驗に關しては、既に同書に他

に五の物語を見、唐朝より時代下つて我國にも少からざる傳説を見得やう。之

と近似せるは覺禪抄地藏卷上六地藏事所引佛教全書一四二一—二頁

地藏菩薩補闕眞言（中略）

此眞言。是蜀郡靜泉寺僧道如。俗姓李。發願讀法花經一萬遍。至元和初。遍

數滿。隣房有二僧。死經七日。却活來云。見地藏菩薩有二冥司。與二卒等。俱時

至上。僧云。汝與道如隣房住否。答云。然也。地藏菩薩云。道如持經萬

遍滿了。然而依遺闕至多。冥官藏不能納之。仰汝持此明。與彼道如。

經一遍每誦此明三返者。遺闕文句圓滿。如法冥官攝受。眞言批有二斯驗記。

云々

を存し、彼に於ては法華經關係にして眞言、之に於ては華嚴經關係にして偈を

訓へられて、地獄より救濟せられる類例とすべきであらう。十輪經所説の如く地藏尊が六道に於ける救主として崇拜せらるゝは云ふ迄もないが、かく特にこの偈を以てするこの説話の信仰内容の重心が何處に置かれるか詳かならず、既

註 此の偈は東晉佛跋陀羅譯華嚴經卷第十夜摩天宮菩薩說偈品第十六卷四六六頁に

若人欲_レ求_レ知三世一切佛應_レ當_レ如是觀一心造_二諸如來_一

唐實叉難陀譯華嚴經卷第十九昇夜摩天宮品第十九卷一〇二頁

若人欲_レ了知三世一切佛應_レ觀法界性一切唯心造とする。

藏光義原柳 伯爵

又此の像に就て仔細に圖像的注記を爲し得べくもないが、地藏尊の双手中に寶珠を按ずるに就ては覺禪抄地藏卷下尊形條佛教全書一四二七頁

十輪經一云。兩手掌中持_二如意珠_一とするに徴すべく、更に同右條佛教全書一四二七頁

東京

不空軌云。内祕_二菩薩行_一。外現_二比丘相_一。左手持_二寶珠_一。右手執_二錫杖_一。安_二住千葉青蓮花_一。

とする我が鎌倉時代に普通なる形相乃至持物よりして冥官と見ゆる地藏尊の左側に侍立する人物の右手に錫杖を持つのも解せられやう。童子の經帙を持して扈從するは又同抄地藏卷下六地藏形像佛教全書一四三四頁

第六天道大堅固地藏_{左持_二寶珠_一右持_二經_一}（下略）

と見ゆるにその持物の意味を附會し得る以上に出でない。しかし既に地藏菩薩儀軌輪婆迦羅譯大正藏經第二の畫像法に示さるゝとは遙に變化を來して居る。加ふるに獨尊像に非して、かく説話的人に人物を附加して構圖せらるゝ事實に就ては、

松本榮一氏が「被帽地藏菩薩像の分布」_{東方學報東京第三册}に於て、

道明和尚の場合、或は十王關係等によつて生じたる廣く數多

に覺禪抄地藏卷上離諸苦事所引佛教全書一四一四頁

花嚴經云。一々地獄中。經_二於無量劫_一。爲_レ度_二衆生_一故。而能忍_二是苦_一。云々

と見ゆる如く一般に華嚴經との關係深きを訓へらるるに留る。

き作例を挙げられたるに顧られる。即、此の圖の特異なる構圖も亦有り得べきものとして類推せられる。而してこの圖の性格は通途地藏像の儀軌的なるよりはかく説話的内容を含む所に成立し來るものであり、その關係よりは圖上題文

も亦不可分に考へ得る。題箋に

古唐畫

地藏菩薩御影 報恩院憲深僧正讚

とする。憲深は醍醐寺成賢僧正に就て受戒、報恩院に住し、建長三年^{西紀一〇九一}醍醐寺に主となり僧正に任じ、弘長三年九月六日^{西紀一一六三}寂、壽七十二と傳へる。今その筆蹟はこの傳稱を信するの外、他に徴すべき確な例を知らないが、圖と贊の關係の直接的なるが故に、之も一所據として圖の製作時代の推定に資するものであらう。

之を古唐畫とする鑑定に就ては、この特異な構圖を描いても、例へば手法に於て地藏尊の口の焦墨線の端を鉤形を描いて筆を起し、その線は口の中央にてV字形線に中斷せらるゝ如き、駕雲の墨描線に沿うて胡粉線を以て勾勒する如き、地藏尊、童子の袖裏に見らるる白地に並行線間を一つ置に朱隈を賦する如き、或は風俗に於て地藏尊の明かに袴を穿つ如き等、奇異にして支那的と思はるるものを見出すが、之等の諸點は他の佛畫にも屢々認めらるるものもあり、綜じて支那畫よりの影響乃至臨摸の結果と考へる以上に出で得ない。寧ろ大體に地藏尊の形相特に顔色の如き鎌倉時代の他の作例と共通するを見る。手法に於て又同様であり、全體に互つて極めて細く筆勢なき描線の性質、或は夫々の

内外彙報

白鶴美術館開館記念陳列

去る五月二十七日より六月十日に至る二週間、白鶴美術館第一回記念陳列が行はれた。同館は關西に於ける蒐集家鶴堂嘉納氏の古稀記念の爲に設立せられ

内外彙報

肉身に於ける粉白、若くは朱、褐の具、服飾その他に於ける群青、綠青、朱、粉白、褐等を配合せる色調は決して和畫として奇異の感を與ふるものでない。僅かに光背周縁のみに截金を認められ、背景に一面に水波と思はるゝ墨描を微かに留める程度に畫面は暗黝を來すが、その色調は當時の金彩の盛んに使用せらるる例に比して著しく裝飾意圖は抑制せられ、むしろその低調な描法は特異な構圖と俱に、主題に關して物語る處を靜かに聽かしむるものをもつ。猶ほ付記すれば此の畫絹の二分置き位に太き經を織込み、讚の地はこの絹とは別なる草色綾であることも通途に異なる處である。(熊谷)

六 浦上玉堂筆玉樹深紅圖 富山縣 馬瀬清九郎氏藏

八曲小屏一雙之内 紙本淡彩 竪五八浬 横約二・八〇米

七 浦上玉堂筆山雨染衣圖 岡山縣 大原孫三郎氏藏

掛幅 紙本水墨 竪三六・〇三浬 横三一・八浬

(以上脇本十九郎「玉堂雜考」参照)

たもので、財團法人の組織に據つて毎年春秋二回公開し、文化事業として社會に資せらるると聞く。主事山本規矩三氏は永く奈良帝室博物館鑑査官補の任に當られし人。同館の美術品の保管、陳列等諸般事務の圓滑な運行と俱に同館所藏品を一般的に認識鑑賞せしめらるる事を期待せられる所である。その蒐集品は既に白鶴帖にその内容を窺ふことを得るが、更にこの陳列は圖録として江